



16世紀末（朝鮮出兵時）の朝鮮半島

朝鮮半島のゆくえ

はじめに

近年朝鮮半島とその周辺が何かと騒がしい。その北部では朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）が経済制裁を受けながらも核兵器や弾道ミサイルの開発・実験を繰り返し、南部では大韓民国（以下、韓国）が北朝鮮に有和的な政策をとる一方、米国とはしばしば対立、更に日本に対しても厳しい外交姿勢を採り対立を深めている。このような状況はまた、日毎に変化をみせており、その将来動向には不透明感が付きまとう。そのような朝鮮半島は今後、どのような状況を迎えることになるのだろうか。

ところで、ある国や地域の動向を予測するに当たっては、それらに関する「歴史」を参考に一般的な傾向を抽出するのが有効な手法の一つ。そこでまずは、朝鮮半島のこれまでの（とりわけ実在性に異論のない紀元前後以降に存在した国家やそこでの政治動向に関する）歴史を概観してみよう。

朝鮮概史

紀元前後の朝鮮半島には、現在の中国東北部の一部地域から北朝鮮並びに韓国北部に至る地域を支配した「高句麗」と、現在の韓国南部地域を支配した「百濟」・「新羅」・「新羅」の三国が併存していた。その中でも高句麗は、中国の「漢」や「魏」・「晋」王朝などとの紛争を経て中国東北部地域の領域支配を確立する一方、後の西晋と結び、倭国と同盟関係にあった百濟の支配地域を侵食している。また倭国と対立していた新羅を支援しその首都から倭国軍を排除するなどし、5世紀までには半島南部にまで勢力を拡大、その最盛期



6世紀の朝鮮半島

を迎えた。更に7世紀に入ると、中国に誕生した「隋」王朝からの度重なる遠征を受けるものの、高句麗側はこれを撃退している。しかしその後、高句麗が百濟とともに新羅に圧迫を加えるようになったことで、新羅は隋の後を襲った「唐」と朝貢関係を結ぶとともに救援を要請する。これに応じた唐は、手始めに新羅とともに高句麗の背後の百濟を滅亡させ（倭国は百濟を支援したものの唐・新羅連合軍に敗北している）白村江の戦い、その余勢を駆って新羅とともに高句麗に侵攻。これに抗しきれず高句麗は滅亡するに至った。一方、残された新羅は朝

貢関係にあった唐と次第に対立するようになり、これとの紛争を経て旧百濟領・半島北部を併呑。7世紀後半には現在の朝鮮半島のほぼ全域（北部は「渤海国」が支配していた）を支配する統一新羅が誕生した。

統一新羅による朝鮮半島支配は9世紀末まで続くが、その後の内紛を契機とした「新羅」・「後高句麗」・「後百濟」による分裂期を経て、10世紀には「高麗」による半島全域の統治が行われるようになる。ただ、その高麗王朝は後に、当時北方の境を接していた（遊牧民の一派であるとされる）「遼」やその後の「金」王朝との間の紛

争で敗北を喫し、その和睦の条件として両国への朝貢を強要されている。また12世紀には内乱に見舞われ、更に13世紀に入ると（遊牧騎馬民族の）「モンゴル帝国」の侵攻を受け、その統治権を失うことになった。そして後のモンゴル帝国（元）による日本遠征（25代高麗王忠烈が働きかけた案ともいわれる）の際には、元側の要求に応え軍船や兵員の提供を行い、実際に九州での戦役にも高麗兵を参画させている。ただ、紅巾の乱などの内乱によって元の国力が低下すると、高麗は従属関係を解消し国境沿いの元領の一部を奪取するなど、独自外交を模索した。

高麗による朝鮮半島支配は元の征服による断絶期間を除き14世紀末まで継続する。が、この統治は臣下の反乱によって覆されることになる。元の後を襲った「明」からの領土侵食を受けていた高麗はこれに対抗するために家臣の李成桂を司令官とする一軍を派遣する。ところが、李成桂は指揮下の軍を率いてクーデターを起こし自身が王に即位。更に明に使者を派遣し、朝貢を約することで恭順の姿勢を示しこれと引き換えに王位の承認を得、更には「朝鮮」という国号の使用許諾も取り付け、これにより「李氏朝鮮」が成立した。

その後朝鮮は、16世紀には日本の豊臣秀吉による「朝鮮出兵」（文禄・慶長の役）を被ることになるが、その際にも明に対する恭順の姿勢は一貫して堅持している。その一方、日本側の意図や力量を軽視し十分な防衛体制を採らなかつたことで、一時的にはあるが半島内の要地を瞬く間に占領されるという事態を招く。また後に、明に代わって「後金（清）」が大陸で勢力を拡大し始めた際にも、朝

鮮側は当初、親明・反清の姿勢を採ったものの、清からの度重なる領内侵攻や武力の示威の前に屈せざるを得なくなり、明との断交と清への服従・朝貢を迫られ、ついに清の冊封体制下に組み入れられるという憂き目にあっている。その後、李氏朝鮮は清の冊封体制の下での半島統治を行ってゆくことになるがしかし、19世紀に入ると欧米列強の東アジアへの進出が活発化し、これに抗し得ない朝鮮側は列強各政府との間で不平等条約の締結を余儀なくされる。また、従来からの半島への影響力を保持し続けようとする清と、朝鮮半島への清の影響力を除こうとする新興の大日本帝国との間で次第に対立が生じるようになる。この両者の対立は朝鮮内部の（日本を支持する「独立党」と清を支持する「事大党」との間の）党派抗争とも結びつき、結果的に両国間の戦争へと発展（日清戦争）するも、これに日本が勝利したことで、李氏朝鮮は清の冊封体制から脱却し「大韓帝国」として独立を果たした。ところが、新たに誕生した大